

冤罪で「愛を引き裂く悪役令嬢」

と呼ばれているのに

王太子殿下に執着されています

## プロローグ

「きゃ……！」

彼女は、いつからそこにいたのだろう。

王城の玄関ホールに続く荘厳な階段を降りるセレスティアナの目の前で、白い光がほんの一瞬弾けたかと思うと、自分のそれではない甘いストロベリーブロンドの髪が揺れた。

「そんな……。どうして……？」

セレスティアナ以上に驚きに満ちた小さな声が聞こえ、華奢な身体はあっという間にバランスを崩す。このままでは階段から落ちてしまう。助けなくてはとセレスティアナが反射的に差し伸べた手が触れるよりも先に、信じられないものを見たかのように薄桃色の目を見開きながら階段を転がり落ちて行く。

むしろ助けようと手を伸ばしたことが、仇となった。だってその姿は、きっと。

「大丈夫ですか？」

セレスティアナは激しく叩きつけられた彼女の身を案じ、踊り場に降りた。

「ミーナ様！」

階下から聞こえる悲痛な叫び声が、階段の最上段から落下して踊り場に打ちつけられた少女の名

を呼ぶ。セレスティアアナが弾かれるように声のした方へ視線を向ければ、年が違うのか全く交流がなく、見知らぬ令嬢がそこにいた。彼女はデイドレスのスカートを両手で押さえながら、急いで階段を駆け上がり、ミーナと呼んだ少女の下へと向かった。そして、もう我慢ならないと言わんばかりに、激しい怒りを湛えた目でセレスティアアナを睨みあげる。

一部の――少女に好意的な人々にとつて、セレスティアアナは『高い身分を笠に着て婚約者に縋り、王太子と聖女の真実の愛を引き裂く悪役令嬢』だ。おそらくは彼女も、セレスティアアナをそうした目で見るうちの一人なのだろう。

「セレスティアアナ様……どうして、このようなことを……!」

「どうして、って」

立ち尽くすセレスティアアナは言葉に詰まった。

聞かれたところで何もしていないことは答えようがない。

でも正直に言ったって、セレスティアアナに怒りを向ける彼女の様子では信じてもらえはしないだろう。事実を伝えても黙っていても、彼女の望むものではないから受け入れられることはないのだ。「わたくしは、何もしてはおりません」

だからといって嘘などつけない。

自らの名譽と矜持を守る為、今はただ無実を主張するしかなかった。

「階段から落ちようとしているミーナ様を本当に助けるおつもりなら魔法を使っていたはずですがセレスティアアナ様はそうさろうとしていなかったではありませんか！ それどころか手を

伸ばして、まるで――」

それ以上を言えば公爵家令嬢であるセレスティアアナへの侮辱だと判断したのか、令嬢は口を嚙む瞬時にその判断ができる思慮深さはあるらしい。だけども思い込みが邪魔をしているせいもあってか、真実を見極める眼力はないようだ。

「真実をお答え下さい、セレスティアアナ様」

「何の騒ぎだ」

令嬢がセレスティアアナにさらに詰問の声をぶつけると同時に、涼やかな声が響いた。

セレスティアアナたち三人の視線が一斉に声のした方へと引き寄せられる。階下に立つ、光り輝く淡い金色の髪と晴れ渡った空を思わせる青い瞳の青年が、声の主だ。

「殿……」

「アレクシス様!」

気安く呼ぶことは許されないはずの彼の名を、ミーナは嬉しそうに口にしました。自分だけは全てを許された特別な存在だと言わんばかりに精一杯微笑んでみせる。

殿下、と控え目に呼びかけようとしたセレスティアアナの声なんて簡単にかき消されてしまう。

アレクシス・オーベリット・フォン・エレメンゴルダ。

魔法国家たる我がエレメンゴルド王国王太子である彼は自らの立場への責任感と振る舞いから、セレスティアアナと同年でありながらひとときわ眩しく、大人びて見える。

そしてセレスティアアナの婚約者でもあるけれど、近頃は別の肩書へ変わるうとしていた。

「セレスティアナ嬢、これは一体」

「待って、アレクシス様。どうかセレスティアナ様を怒らないであげて」

踊り場へとやって来たアレクシスが、動けずにいるセレスティアナに向けた言葉をミーナが遮った。

王太子の言葉を遮るなど不敬な振る舞いもいとこらだ。唯一咎められる立場にあるアレクシスはそこに触れることすらせず、セレスティアナの答えを待つように真つすぐに見つめている。

セレスティアナは視線を下げた。

分かっている。

普段同様にセレスティアナを愛称で呼ばないのは、公の場で公平を期す為だ。セレスティアナに事情を聞いたのも、取り乱さずに冷静な答えが返って来ると期待していると強い信頼の現れだ。喜びこそすれ、悲しむことは何もない。

——でも。

「お言葉ですが殿下、わたくし一部始終を見ておりました。セレスティアナ様が、わざと階段の上からミーナ様を突き落としたのです」

ミーナの不敬をアレクシスが咎めなかったことは、やっぱり特定の立場にいる人々の気を強くさせた。本来なら自分から口を開くなんてできないであろう、ミーナを支える令嬢がアレクシスに訴えかける。

その言い分にセレスティアナは息を呑んだ。

危惧していたことが起きてしまった。

嫉妬に駆られたセレスティアナが、明確な悪意を持って突き落としたと思われる。

「わたくしはそのようなこと……」

「アレクシス様！」

ありのまま真実を伝えようとするセレスティアナの言葉に、ミーナの大きな声が重なった。

「セレスティアナ様は、私がアレクシス様と親しくしているから……嫉妬で魔が差してしまっただけだわ。悪いのは、アレクシス様を好きになってしまったミーナなの。もちろん驚きはしたけれど、ご覧の通りミーナは無事です。だからどうかセレスティアナ様を叱らないで差し上げて」

ミーナは大きな瞳に涙を浮かべ、アレクシスに寄り添うように腕を必死に掴んだ。その様子にセレスティアナはひどく動揺して言葉を失う。

嫉妬して魔が差したから？

好きになったのが悪い？

彼女は一体何を言っているのだろうか。

セレスティアナを案じているようでそうではない言葉に、眩暈を起こしそうになる。

人が人を好きになることは何も悪くない。恋をすること自体は身分など関係なく平等に与えられた権利だ。けれどミーナが恋をした相手は、すでに婚約者がいた。そしてセレスティアナも恋をしているからこそ「彼を諦めて欲しい」と、ミーナの想いを断じるようなことは言えなかった。

(それでも……わたくしは勇気を出して言うべきだった)

ミーナが想いを秘めることなく貫いた結果、今ではセレスティアナの想いこそが悪として扱われている。

先に婚約者に決まっただけで、愛されてもいないのに縋り続けているのだと。

「——そうか」

「殿、下」

アレクシスがゆっくりと頷くのを見て、セレスティアナはドレスのスカートをきゅつと握りしめた。

(殿下は……アレク様はもう、わたくしの下に来ては下さらない)

ミーナは悪意に晒され、わざと突き落とされたと“唯一の証人”が言っている。立場も弱い彼女を心配するのは何らおかしいことでもない。

政略で決められた婚約者ではなく、自らが想い選んだ恋人であるのならなおさらに。

今の社交界においてアレクシスとミーナは“身分の差を乗り越えて尊い愛を貫く悲劇の恋人同士”で、セレスティアナは“想い合う恋人同士を、身分を笠に着て引き裂こうとする哀れな悪役令嬢”だった。

(わたくしは、どう振る舞えばいいの?)

目の前が真っ暗になる。

公爵家令嬢のセレスティアナが、爵位の低い相手に何の主張もせず言い負かされた拳句、人前で涙を流すようなみつももない振る舞いをしてはいけない。

でも、胸が苦しくて今にも溢れそうになる。

アレクシスには何が真実として映っているだろうか。

知りたい。

けれど、セレスティアナと違うものを映しているのなら、知りたくない。

ミーナを心配そうに、愛おしそうに気遣うアレクシスの顔も、見たくない。

セレスティアナは顔を上げきれず、唇を噛んだ。痛みで無理やり気を逸らすことで涙を押し戻して口を開く。

「わたくしは本当に何もしておりません。ですが——そちらの方の“証言”を信じると仰るのであれば、どうぞ殿下の御心のままに」

淑女の礼をして足早に階段を降りて行く。

「待つんだ——ティアナ」

アレクシスが呼び止める声が聞こえただけれど、セレスティアナは振り返ることも、足を止めることもしなかった。

【1】 前兆

——それは、とある伯爵家の令嬢が聖女と称される二か月ほど前から兆しが見えていた。

□ ■ □

「おかえりなさいませ、お父様！」

父の乗る馬車が到着したという報せを受け、今か今かと玄関ホールで待ち侘びていたセレスティアナは、久し振りに父が屋敷に戻るのを見るなり薄水色の大きな瞳を輝かせて駆け寄った。

緩やかなウエーブを描く、わずかに青みがかった長いプラチナブロンドを軽やかに揺らす姿は淑女らしからぬものだ。いつもなら母から厳しく注意されていることも、今日は特別に見逃してくれたらしい。母は困ったような笑みを浮かべつつ見守るだけだ。

「母様の言うことをしっかりと聞いて、いい子にしていたかいセレスティアナ」

「お父様ったら……わたくしはもう子供ではありませんのよ」

セレスティアナは今年で十九歳になるというのに、一か月振りに会う為か父は子供扱いをして頭を撫でる。くすぐったさに、父の愛情を嬉しく思いながらもセレスティアナはわざと不満そうに唇

を寄せた。その子供じみた反応に父は楽しそうに笑いながら「すまないね」と謝罪を入れ、セレスティアナも「分かって下されば結構ですわ」と澄ました顔で答えて笑った。

「ティアナ、僕には出迎えやねぎらいの言葉はもらえないのかな」

耳馴染みの良い低い声と共に父の後ろから瘦身の美丈夫が姿を見せる。

セレスティアナの婚約者でもある王太子アレクシスだ。

「アレク様……」

「僕も、君の父上についてウォルタスタン公爵領にずっと行っていたんだけどな」

「お疲れ様でした、アレク様」

常に一点の隙も見せない完璧な彼が拗ねたような言葉も愛おしく、心からの言葉を笑顔で伝えればアレクシスも笑みを浮かべて頷く。ともすれば冷酷な印象を与えかねないほどに美しく整った顔が柔らかなものに変わる瞬間も、セレスティアナはとても好きだった。

「他にもないウォルタスタン公爵家の一大事だからね。僕で役に立てることがあるのなら喜んで手を貸すよ」

「領地の様子はいかがでしたの？」

父が王太子であるアレクシスを伴ってまで一か月近くの間、屋敷を不在にしていた理由。

それは王都より馬車で五日ほどかかる距離にあるウォルタスタン公爵家領地の教会に置かれた、水の精霊を象った石像に細かな亀裂が入ったという連絡を受けたことがきっかけだった。

「ティアナ。殿下とお父様が無事でお帰りになったことを喜ぶのは分かるけれど、まずは応接室の

ソファに腰を落ち着けてからお話を伺いましょう」

母がやんわりと間に入り、セレスティアナもはっとして頭を下げる。

「戻られたばかりでお疲れなのにごめんなさい」

「行こう、ティアナ」

夜会のエスコートのようにアレクシスに右手を差し出され、セレスティアナははにかみながらもそつと自らの左手を添えた。優しく握り返されると母は微笑まし気に目を細めるのに対し、父は複雑そうな顔をする。

アレクシスはそのような両親の反応も分かたうえで、そうしているのだ。普段は冷静な男性陣二人の水面下での攻防に、セレスティアナは母と顔を見合わせて笑った。

「お二人が今日お帰りになるとのお話でしたから、お母様とクッキーを焼いてお待ちしておりますの」

「ティアナと公爵夫人の手作りクッキーはおいしいから楽しみだね」

「アレク様が特に好きなブラックペッパーとチーズのクッキーも、もちろんご用意してありますわ」

「うん。ありがとう」

他愛のない話をしながら両親と一緒に応接室へと向かう。すでにメイドたちはお茶と焼き菓子の準備をはじめており、扉を開けると茶葉の香<sup>かぐ</sup>しい匂いが広がった。

アレクシスが公用で訪れた時はいつもそうするように、今日も両親が一人掛けのソファに腰を

下ろし、セレスティアナはアレクシスと並んで三人掛けのソファに座る形で両親と向かい合う。支度を終えたメイドたちが場を離れると、父はおもむろに口を開いた。

「セレスティアナ。我がウォルタスタン公爵家がこの国においてどんな役割を果たしているのか、君ももちろん公爵家の一員として理解しているね？」

「もちろんです。建国時から続いている、大切なお役目ですから」

セレスティアナは知識として学んだことを思い出しながら頷いてみせる。

かつてこの世界は、神族と魔族とが支配権を巡って争っていたという。

激しい戦いは何十年、何百年にも及んだ。強い魔力を持つ人間は神の尖兵として駆り出され、魔

力なき人間は強大な力のぶつかり合いになす術もなく、暮らしは緩慢な速度ながらも困窮<sup>おぼ</sup>に陥る一

方だった。

神に救いを求め続けるも神々は魔族との戦いに力を注ぎ込んでおり、人を助ける余力などない。

その事実の人々が気がつきはじめ、静かな絶望が地上を覆って行く中、一人の青年が現れた。

「類稀なる魔力と知恵を持ち合わせた勇敢な青年は長きに渡る戦いに終止符を打ち、我が国を興し

ました。初代の国王陛下となられた彼から公爵位<sup>たみま</sup>を賜り、血筋と魔力を以て国の守護に尽くすよう

求められたのが我が公爵家です」

「ティアナはさすがに、しっかりと学んでいるね」

アレクシスはセレスティアナの勤勉さを褒め、どこか嬉しそうに目を細める。

「恐れ入ります。ですが、建国の経緯は子供でも知る話ですわ」

英雄譚とも言える話には、さらに続きがあった。

後に王となる青年は、争いを好まない愛と平和の女神の血を引いており、それまで地上の覇権争いに一切の関与を見せなかった精霊王の信頼と助力を得ることができた。

停戦を結べたわけではなく、戦力のほぼ全てを失った魔族が地底の王国へ撤退した際、精霊の力で門を封じたのだ。

また、公爵位を与えられたのは、四体の精霊の加護を強く得た者達の勢力を分散させる意図もあっただろう。建国以来、魔法は人々の中にも浸透して行つた。自分による根本的な魔力の差はあれど、今ではこの国の民全てが大なり小なり魔法を使えるようになっていて。それでもセレスティアナの父が現在の主を務めるウォルタスタン公爵家が、水の精霊の血と魔力とを色濃く継いでいることに変わりはない。

それは裏を返せば、ウォルタスタン公爵家や公爵領、領地にある精霊像に何かあれば、国を揺るがす一大事に発展しかねないということだ。

「それで、領地の様子は……？」

待ちきれなくて結論を急いでしまう。

普段は王都に在るけれど、セレスティアナにとっても大切な場所だ。何もなければ安心して安んじたかった。

「殿下にもご確認いただいたが、今は取り立てて異常は見られなかった」

「しかし小さなものとはいえ、四大精霊像にひびが入った記録は我が国の歴史上一度もない。建国

時よりあるとされる精霊像だ。仮に原因がただの経年劣化によるものならそれはそれで構わないが、この後、城に戻り次第、陛下と相談して今後のことを話し合うつもりでいる。場合によってはウォルタスタン公爵に多大な負担をかけることもあるだろう」

「水の精霊の加護を受けた家門の長として、当然のことと理解しております」

公爵家にとって象徴とも言える精霊像に関する話だけに、慎重な判断が長期的に必要とされるようだ。

けれど王家の、アレクシスの協力を得られるならこんなに心強いこともない。ひとまずの不安も去り、セレスティアナはほっと肩で息を吐いた。

そうして穏やかな談笑の時間を一時間ほど過ごした後で、アレクシスは王城へ戻ることになった。久しぶりに会えた婚約者とまだ一緒にいたかったけれど、ただでさえ多忙な彼に時間を割かせてしまっているのだ。わがままは言えない。

「わたくしも何かお役に立てられることがあればいいのに……」

せめてもう少しだけでもと玄関まで見送り、セレスティアナは無力な自分を実感して項垂れた。

跡継ぎではないからか、それとも素質の問題なのか。王家に次ぐ魔力を誇るとされる四大公爵家の一角に生まれながら、セレスティアナは取り立てて強い魔力を持っているわけではなかった。——それどころか。

「ティアナはティアナのまま、僕の傍にいてくれたらそれだけでいいよ」

アレクシスの手が優しく頬に触れ、沈む心ごと引き上げるように顔を上に向かせた。

「アレク様……」

優しい光を帯びた青い目と視線が合う。

彼の力になりたい。王太子ではなく、アレクシスだから手助けをしたいと願ってやまない。

見上げるセレスティアナの額に、ほんの一瞬だけアレクシスの唇が触れた。額に口づけられる度、胸が切なさで苦しくなる。愛おしさが溢れ、いっぱいになった。

「また会いに来るから」

「楽しみにお待ちしております」

「うん」

笑顔でアレクシスを見送るセレスティアナの胸に、ごく小さな不安がよぎったことはセレスティアナ自身も含め、誰も知らない。

「お父様、また領地へ行かれるとお聞きしました」

丈の長い神官衣に身を包んで出かける支度を整えた父に、セレスティアナは声をかけた。

数日前に戻って来たばかりだ。それが今度は領主としてではなく水の精霊の神官長として出向くらしいのが、不安を漠然と煽る。

さしもの父も眉間に深いしわを刻みながら答えた。

「水の精霊の加護が弱まって来ているそうだ。我が領地だけの問題で済めば良いのだが……」

「殿下にはご連絡を……？」

「もちろん文書をお送りしているよ。殿下を通し、すでに陛下のお耳にも入っておられることだろう。だが、あくまでも領地内で起きたことだからね。水の精霊を司る公爵家の名譽において、主である私が解決せねばならないことだ」

加護が弱まったなんて話も聞いたことがない。万が一、水が穢れるようなことがあれば人々の暮らしにも大きな影響が出てしまうだろう。

精霊像の亀裂が原因で、水の精霊の機嫌を損ねてしまったのだろうか。けれど、水の精霊は地の精霊と並んで温厚な気性だと知られている。もちろん信仰を疎かにしたことなどなく、機嫌を損ねたとは考えられなかった。領地を離れているセレスティアナにも分かるほど単純な事態ではないにしても、父にも原因が分からない様子なのがより恐ろしく思う。

「どうぞ、お気をつけて行ってらっしゃいませ」

「お母様の言うことをしっかりと聞いて、いい子にしているんだよ」

「お父様ったら……。わたくし、もう子供ではありませんわ」

それでも父にとって、セレスティアナは子供扱いをしたくなる存在なのだろう。出迎えた時と同じようなやりとりをして、再び領地へと向かって行った。

十日が過ぎた頃、自室で読書を嗜んでいるとドアがノックされた。

「どうしたの？」

ドアを開けると母付きの侍女が立っている。

「おくつろぎのところ大変失礼いたします。奥様がお呼びでございます。応接室へとおいでいた

けますか」

「お母様が？」

母が余暇の時間に自分を呼ぶなんて珍しいことだ。セレスティアナは疑問に思いながらも、反発する理由もない為に侍女の後をついて応接室に向かった。

「奥様、お嬢様をご案内しました」

侍女は閉じられたドアをノックしながら声をかけ、返事を待たずにドアを開ける。

室内には母だけでなく侍従もいた。ソファーに座る母の前に片膝をつき、呼吸が乱れているのか激しく肩を上下させている。侍従は確か、父の供で領地に向かつていた内の一人だ。母は見たこともないほど顔を青ざめさせ、しかし公爵夫人らしく厳しい表情だった。穏やかではない雰囲気はセレスティアナは息を呑む。

「旦那様の状態はどうなのでしょう」

「い、今は……医師が一晩中、付き添っておりますが……依然として意識は」

「お父様が、どうかなさったのですか」

話の腰を折ってしまうのは気が引けたけれど、何も分からない状態で一段落つくまで聞き続ける気にもなれずにセレスティアナは母に近寄って声をかけた。

何かあれば父が魔力を込めた伝令鳥を飛ばす手筈になっている。それが使いを寄越すなんて想定外の事態だ。父に何かが起きたことにより、一方通行な伝令ではなく、やりとりができた方が良いと判断が下されたのは想像に難くない。

「急に意識を失って倒られたそうなの。原因は未だ不明……そうでしたか？」

母はセレスティアナに視線を移し、最後は侍従に向かって確認するように尋ねる。侍従は何度も首を縦に振った。

「ならお父様は今も領地に？」

「はい。教会に駐在する精霊騎士の中でも特に腕の立つ者たちを手配し、厳重な警護体制を敷いております」

果たして父の命に別状があるのかわからないのか、これだけではよく分からない。父の状態が状態なだけに、領地でも原因の特定を急いでいる段階なのだろう。

「ある程度の状況は分かりました。旦那様が無事に戻られるまでの間、わたくしが女主人として旦那様に代わって屋敷をお守りいたします。ですからこちらのことは心配せず、あなた方は旦那様を最優先して動いて下さい」

「奥様の仰せのままに」

おっとりした母が毅然とした態度で命令を下す姿を見て、セレスティアナは強い尊敬の念を抱く。(とても堂々と振る舞われて。わたくしもお母様みたいな女性になりたい……)

貴族の妻とは、こうあるべきものなのだ。ましてや王族に嫁ぐことが決まっているのならなおさら。

そして一週間後、意識を取り戻した父は屋敷に帰って来た。

「旦那様が無事で何よりでございます」

「君にはずいぶんと負担をかけてしまったようだね」  
 「とんでもございません。ウォルタスタン公爵家を統べる当主の妻として役割を果たしたまでですわ。それに、ティアナも助けになってくれましたから」

元気そうな様子の父を姿勢良く出迎えた母の瞳は涙で滲んでいる。

この一週間、母の献身ぶりはセレスティアアナがいちばん近くで見ている。セレスティアアナも役立てることはないかと尋ね、淑女教育の一環も兼ねて多少の手伝いはしたけれど、それでも全体の仕事量としては助けになったかも分からないほど微々たるものだ。結果、母への尊敬の念はより強いものとなった。

「そうか。ティアナもありがとう」

「お母様のご尽力して下さったおかげですわ」

「さあ旦那様、屋敷に戻られたのですから、安心してお休み下さいな」

「ああ。そうさせてもらおう」

意識意識を失った理由は結局判明しなかったのだという。さらに父は自らの回復の為に魔力をかなり消費してしまい、失った魔力が戻るにはもうしばらく時間がかかると判断された。万が一、魔力がこのまま戻らずに総量自体が減ったのであれば、神官職を兼任する公爵位から退くこともありうる。

跡継ぎはセレスティアアナとは二歳違いの弟がいるけれど、魔力は申し分なくともウォルタスタン公爵家の主となるにはまだ幼く、学ぶべきことも多い。余計な火種を生み出さない為にも父の回復は皆が心から望むことだった。

「お身体の具合はいかがですか、ウォルタスタン公爵」

父が屋敷に戻って療養するようになった三日後の昼下がり、一人の青年が訪れた。

わずかに角度をつけたヘッドボードに上半身を預けていた父が起き上がりうとするのをやんわりと制し、青年は穏やかに微笑む。淡い金の髪に青い瞳はどことなくアレクシスを思わせるものだ。もつとも、雰囲気似ているのも無理はない。青年——ハイネル——ハイネル・オルランディは現国王の実弟であるオルランディ公爵の嫡子なのだ。

オルランディ公爵家は四大精霊を司る各公爵家を束ねる役割も持っている為、ハイネルとはアレクシスと出会う数年前——セレスティアアナがまた領地で過ごしていた頃から何度も顔を合わせている。王族に連なりながらも気さくで話しやすい、セレスティアアナより三歳年上の彼は実の兄妹きょうだいのように親しい相手でもあった。

その仲の良さから、当初はハイネルの婚約者に……という話も両公爵家の間で出ていたらしい。とはいえ爵位を考えると王太子の婚約者選定が優先されるのは当然で、あくまでもその可能性もあった、という程度の話だと聞いている。

「どうぞお気遣いなく。本日は父に言われてお見舞いに伺っただけですので」

「わざわざ足を運んで下さり、恐れ入ります」

「倒れられたと報せを受けた時は心配いたしましたですが、ウォルタスタン公爵もお元気で安心し

ました」

「魔力の制御もできずに倒れるなど、四大公爵家の一員として非常にお恥ずかしい限りですが、ご覧の通り体調には何ら問題はございません。オルランディ公爵にもどうぞよろしくお伝え下さい」

「我が国を支える四大公爵家の一角たる公爵の様子を知れば、父も安心します」  
和やかに父との挨拶を終えたハイネルと目が合った。

王太子より三年早く生まれた王弟の嫡子の下、良からぬ火種を発生させようと目論む一派が水面下にいることはセレスティアナも知っている。正統な王太子という血筋だけではなく、アレクシス自身が建国王の再来と呼ばれるほどの魔力を所持しているから不穏分子を黙らせていられるものの、四大公爵家の娘であるセレスティアナが彼の婚約者に決まったことも政治的な思惑があつてのことだろう。

けれどハイネルは権力というものに興味を示さず、アレクシスとも従兄弟同士で親しくしていた。二人が言い争う姿だつて、それこそ幼い頃にセレスティアナが焼いたクッキーをどちらが先に、多くもらうかを競っていたくらいだ。

「ティアナも久し振りだね。すっかり未来の王妃らしく綺麗になった」

「お久し振りで、ハイネル様。ハイネル様は社交辞令がともお上手になりましたわ」

右手を左胸に当てた紳士の礼を受け、セレスティアナも淑女の礼で応える。

子供の頃から見知った相手にお世辞を言われると、何だかひどくすぐつたい。

「僕は事実を言つたままでだよ。これならアレクシスも安心だろう……いや、こんなに美しい王妃で

は逆に心配が絶えないかな」

「まあ、ハイネル様つたら、本当にお上手」

「ではご褒美のお手製クッキーはいただけますでしょうか」

「そうね。特別にたくさん差し上げてよろしくてよ」

「光栄にございます」

わざと気取つたやりとりをして同時に笑い合う。

少しのトラブルこそあれど、何も変わらない。セレスティアナは温かく優しい人々に囲まれていゝ。

再び胸を小さな影がよぎつたことを、気づかせないほどに。



「白金の魔力……偉大なる聖女様の能力を受け継ぐ人物が現れたそうだ」

体力が回復し、領地の状況を国王へ報告しに行った父は王城から戻るとそう告げた。

「聖女様、ですか？」

「うむ。特殊な魔力の波動を持つ令嬢が伯爵家に見つかり、オルランディ公爵をはじめとする元老院の立ち合いの下、まずは精霊教会で正式に聖女と認めたと陛下に報告が入つたらしい」

後に建国王となった青年が精霊王の信頼を得られたのは他でもない。精霊王の末の王女と恋に落

ちていたからだ。

末王女は精霊王の代理として人間界と精霊界を繋ぐ門を開くことができ、後に聖女と呼ばれるに相応しい献身ぶりです。以て建国王を支えた。

(けれど……神々と魔族の争いを終結させた建国王でも、その恋は幸せな結末を迎えなかった)

一説によれば精霊王が特に可愛がる末王女を人間界に留めることを許しはしなかったとか、別の歴史書には人間界の空気が合わずに早世してしまっただと、あるいは建国王に横恋慕する令嬢が無理やり妻の座に収まったとか……。いずれにしても、建国王と精霊の王女は悲恋として伝えられている。

(いえ。悲恋に終わった恋だからこそ、今でも語り継がれているのかもしれないわ。この国の建国の為に尽くして下さった御方だもの)

そして今、何らかの理由で末王女と同じ力を持つと思しき人物が現れたという報せはセレスティアナの胸をひどく騒めかせた。セレスティアナ自身でさえ気がついていなかった、父と共に領地から戻って来たアレクシスが王城へ帰るのを見送る時や、ハイネルと久し振りに会った時に感じたものを初めて自覚したのだ。

(何か良くないことが起こりそうな気がする……。でも、どうして?)

領地や父に良からぬことは起きたけれど、国内は平穏だった。

アレクシスも国王を支え、尽力しているのだ。ウォルタスタン公爵家の領地で起きたようなことなど、王都で起こるはずもない。

——なのに、どうして不安に思うのだろう。

「陛下だけでなく、殿下も聖女様のご出現をご存じなのでしょうか」

「元老院から伝えられ、近いうちに聖女様との面会をする手筈になっているそうだ」

「そう、ですか……」

「同じ力を持つていようと人間である以上、精霊王の末王女たるかつての聖女様とは別人だと殿下も認識しておられる。もちろん、殿下ご自身も建国王の血を継ぎ、彼の再来とまで言われるほどの魔力の持ち主と称されていても建国王ではないこともね。ティアナが心配することはないよ」

「……はい」

父の言葉はまさにセレスティアナの杞憂そのものだった。頭では分かっているけど、もしかしたら……との思いが払拭しきれない。

直系の血を受け継ぐからか、肖像画に描かれた建国王の姿とアレクシスはよく似ている。彼が強い魔力を持っている為に生まれ変わりではないかと噂されてもいた。

そこへ、末王女と同じ力を持つ令嬢が現れたとなつてはどうなるか。深く想い合いながらも結ばれなかった悲劇の恋人同士が、長い時間を経て再び巡り会ったかもしれない可能性に人々はきつと夢中になる。末王女の肖像画も精霊王同様にたった一枚も残されてはいなかったけれど、運命の前には些細なことだ。

(大丈夫。アレク様を信じてるもの)

夜、セレスティアナは寝つけずにいた。

言い様のない、この漠然とした不安は何なのだろうか。

聖女が現れたということは、何らかの危機がこの国に差し迫っているということだ。けれど、そうした国家としての危機に瀕しているのはまた別の……セレスティアナ自身の奥から湧き上がる何かが駆り立てている。

（わたくしが考えていても何が起きようとしているのか分からないし、アレク様をお手伝いできる対応策も浮かばないけれど……）

ただの杞憂で何も起きなければいい。

そう願うしかできなかった。



夢を見た。

十歳だった頃の、初めてアレクシスと出会った日のことだ。

ずっと領地で過ごしていたセレスティアナは一週間前に王都の屋敷に戻り、今日は父に連れられて王城に来ていた。

初めて目にする王城は想像よりも遥かに大きくて煌びやかで、どこを見ても楽しい光景ではあつたけれど、父は国王と大切な話をする用事があるのだという。セレスティアナは少しの間、一人で

時間を潰すことになってしまった。父の進言により国王の使者に散策を許可してもらい、中庭の景色を楽しみながらのんびりと歩いていたら、その時だ。

「どうしてそんなところにいるの？」

立派に伸びた木の枝の一本を見つめ、セレスティアナは声をかけた。

そこには見たことがないほどに綺麗な少年が腰を下ろしている。彼は驚いたようにセレスティアナに視線を向け、慌てた様子で周囲を見渡した。セレスティアナ以外に誰もいないことを確認したのか、軽やかに地面に降り立った。

陽光を反射して金色の髪が動きに合わせて輝き、何も無い中空に光の筋を描く。その光景はとても美しく、セレスティアナは思わず呼吸も忘れて見惚れてしまった。

「僕が見えるのか？」

「え？ ええ。見えるわ。普通はあなたは見えないの？」

声をかけられて今度はセレスティアナが驚きつつも頷けば、少年は眉根を寄せた。

「見えない……はずだけど」

「もしかして、人じゃなくて精霊の王子様なの？」

どんだん険しい表情になる少年に尋ねれば、一転して不思議そうな顔になった。

「僕が精霊の王子様？」

「ええー！」

セレスティアナは力強く頷いた。

普通は見えないのに何らかの理由でセレスティアナには見えている理由はともかく、こんなに綺麗な人をセレスティアナは見たことがなかった。セレスティアナの家族も皆、綺麗な人だと思うけれど、彼は纏まとう空気が少し違って見える。

だから見たことがない存在……精霊なのではないかと思ったのだ。そして召喚されずとも実体化できるのなら、より高位の存在、つまりは精霊の王子様に違いない、と。

そう考えると先程、背中に羽が生えているかのように降り立ったのも納得が行く。

「いや。違うよ」

「違うの？ とても綺麗だから、そうなのだとばかり」

精霊の王子様ではないと否定され、思わず少しがっかりしたような声をあげてしまった。

(とつても綺麗なのに……)

「……あまり、綺麗だって言わない方がいい」

少年はまじまじと見つめるセレスティアナから顔を背け、ぼそりと呟いた。どうやら彼にとつて「綺麗」は言われて嬉しい言葉ではなかったらしい。でも確かに、褒め言葉のつもりではあっても、彼の何を何も知りほしくないのに軽はずみな言動だった。セレスティアナは深く反省して、素直に謝罪を口にした。

「ごめんなさい。気を悪くしてしまった？」

「僕は悪くしてない。でも……僕以外には言わない方がいいよ」

「ええ。これからは言わないようにするわ」

もつとも、彼以外に言っではいけないと言われても、同じかそれ以上に綺麗な存在はなかなかない気がする。

言わないと約束したものの、他の誰にも言う機会はないだろう。

「それから」

「それから？」

「今日、僕とここで会ったことも言わないで欲しい」

「分かったわ。秘密ね」

本人に否定されたのに、やっぱり精霊の王子様だから秘密にして欲しいのかもしれないと、セレスティアナは嬉しくなった。

「枝の上で何をしていたの？ もしかして邪魔をしてしまった？ それならごめんなさい」

先程は別の話に流れてしまった疑問をもう一度尋ねながら謝罪も口にする、少年は今度はその場に腰を下ろした。

「別に……ただぼんやりと景色を眺めていただけだよ」

「今日はとても良いお天気だものね。わたくしも、お父様に中庭を散歩しておいでって言われたから来たの」

「こんな状況じゃなかったら僕が案内してあげても良かったんだけど」

何の目的もなくぼんやりしていたと言ったばかりなのに、彼は取り込み中らしい。

立ち去った方がいいだろうか。迷いはするも、何故か足が動いてくれない。

「座つたら？」

苦笑しながら勧められ、セレスティアナは指し示された場所と彼の顔とを見比べた。

「いいの？」

「だめなら言わないよ。だからどうぞ」

さりげなく脱いだ上着を自分の隣に広げ、少年はセレスティアナを促す。大人の紳士のような振る舞いにセレスティアナの胸がどきどきと高鳴った。

今、セレスティアナの顔は真つ赤になっているに違いない。おかしく思われてはいないだろうか。だけどデイドレスが汚れないように気遣ってくれた好意を無下にするのも失礼な気がして、セレスティアナは思い切つて隣に座った。

「……君、今まで怪我や病気になつて治療魔法をかけられた時、どうだった？」

「え？ えっと……ないわ」

いきなりの質問に戸惑いながらも、今までそんな経験があつたかどうか思い返してみる。けれど少なくともセレスティアナの記憶にはなくて正直に告げた。

「ない？ 一度も怪我や病気をしたことがないってこと？」

「幼い頃の記憶はないから多分だけ……。病気で大変だつたつていうお話をお父様たちから一度も聞いたことがないもの」

「ふうん。なるほどね」

少年は彼の中で何かに納得がいったように頷く。

「君、今まで王都にはいなかった？」

「どうして分かつたのだろう。」

驚きながらもセレスティアナは頷き返した。領地で過ごして王都に来て間もないことを話すと、少年はさらに納得した表情を見せる。

「僕が魔力の気配で探しているのを逆手に取つて隠されていたわけか」

独り言ちる少年は急に大人びて見えて、彼のことを何も知らないけれど全く別の人のようだ。考え事しているのなら邪魔をしてはいけなないと押し黙ると、ふいに少年が視線を向けた。

「じゃあ、これからも怪我や病気をしないように気をつけて。……君が特に気をつけてなくても、しないでらうけど」

「それは一体、どういうこと？」

「どこか楽しそうな様子に、からかわれた気がして問いかけようとした時だった。」

「——ティアナ。どこにいるんだい」

「お父様と呼んでいるみたい。もう行かないと」

遠くから父が自分を探しているらしい声が聞こえる。

「それでは、わたくしはこれで失礼いたします」

会ったことが秘密なら、一緒にいるところを見られてはいけない。彼ともう少し話してみたかったし、名前だつて聞きたかつたけれど、セレスティアナは淑女の礼をすると少年に別れを告げた。

少年の名や立場を知ったのは、それから二週間ほど経つてのことだ。再び父と登城し、今度はセレスティアアナも謁見の間に向かうと、美しく気品のある女性と共に少年がいた。彼は精霊の王子様ではなく、人間の王子様だったのだ。

「この子ったら先々週のオルランディ公爵家を交えた会合には姿を消していたのに」

王妃の言葉に、セレスティアアナは王太子のアレクシスと紹介された少年を反射的に見やった。アレクシスはそれとなく立てた人差し指を口元に当て、余計なことを喋らないよう牽制するような仕草をする。セレスティアアナも周りに気がつかれないよう小さく頷くも、どきどきと胸が高鳴っていくのを抑えられない。

先々週、セレスティアアナは人知れず偶然、中庭でアレクシスと会っていた。

そう思うとアレクシスの特別になれた気がして胸がいつぱいになる。

「母上。セレスティアアナ嬢に中庭を案内してもよろしいですか」

「その許可はわたくしにはなく、セレスティアアナ嬢のお父上のウォルタスタン公爵から得るものではないかしら」

「——どうぞ。構いませんよ」

王妃に話を振られては父も断るわけにはいかなかったようだ。それでも不満気な様子を隠しきれずに許可を出した。初めて見る父の反応にセレスティアアナが驚きで目を丸くすると、王妃は楽しそうにくすぐすと笑う。王妃は優しい人だという印象だったけれど、こうした笑顔を見るのもやっぱ

り初めてだった。

「じゃあ行こう、セレスティアアナ嬢」

差し出された右手にセレスティアアナはそつと自らも手を出して繋いだ。

指が触れ合った瞬間、心が優しいもので満たされる。家族以外の男の子と手を繋いだのは初めてなのに、もう何度も繋いだことがあるような、どこか懐かしい切なさも覚えた。

すれ違ふ衛兵たちは皆がアレクシスの姿を見ると足を止めて敬礼し、手を繋いで歩く様が微笑ましいのか柔らかな笑みを浮かべる。彼は、城の人々に愛されている王子様らしい。

「見せたいものがあるんだ」

「わたくしに、ですか？」

「うん」

王太子だと知った今となっては気さくに話せず、ぎこちない受け答えになる。前回とは態度が変わったセレスティアアナを、アレクシスは不満に思うような寂しさを抱いているような、複雑な表情で見たものの、何を言うでもなかった。セレスティアアナは四大公爵家の娘だ。その立場と自覚を理解してくれたのだろう。

薔薇の生垣やアーチが美しく手入れされた中庭を眺めながら歩く。前方に小さな温室が見えて来た。アレクシスは温室に向かい、光を反射して煌めくドアを開けるとセレスティアアナを中に案内してくれる。

「わあ……素敵！」

セレスティアナは感嘆の声をあげた。

中で咲き乱れているのはマーガレットだった。愛らしい花が、降り注ぐ光を受けて白い花びらを七色に輝かせている。

「この温室は僕が管理しているんだ」

セレスティアナの反応に気を良くしたのか、アレクシスはどこか誇らし気だった。

マーガレットは、ここエレメンゴルド王国では大きな意味を持つ花だ。精霊王が人前に姿を現すことを厭い、彼自身に限らず精霊たちの王族に連なる存在の姿を描くことを禁じた為に肖像画の類は残されてはいないけれど、建国王の支えとなった末王女はマーガレットで編んだ花冠で美しい髪を飾っていたと伝えられている。

「殿下がお一人で？」

「最初は庭師に教えてもらっていたけどね。あまり大きな温室でもないから今は僕に全て任されているんだ」

「マーガレットが可愛いだけじゃなく、こんなに綺麗なお花だということを知りましたわ」温室に咲いているのは特別な品種ではないはずだ。

でも本当に、お世辞などではなく可愛らしくも美しい。中庭に咲いていた薔薇とはまた違う魅力に溢れている。それだけアレクシスが丹精込めて育てているに違いない。

ふいにセレスティアナの右耳の上に何かが差し込まれた。驚いてそっと右手で探ると、柔らかな感触がしてくすぐったい。

この形は、もしかして。

「よく似合うよ。可愛くて綺麗だ」

一輪のマーガレットをアレクシスが髪に差ししてくれたのだ。たちまちセレスティアナの頬が熱を帯びていく。褒めてくれたのはそれこそ社交辞令かもしれないけれど、嬉しい。

「ありがとうございます」

はにかんだ笑みを浮かべてお礼を伝えると、アレクシスも柔らかく微笑んだ。その表情を見ると、どんどん胸が苦しくなってくる。

こんな感覚は初めてだ。

だけど不思議と嫌じゃない。温かくて、心地良さすら感じる。

「秘密にしてくれているんだね」

中庭で会った時のことを言っているのだろう。

セレスティアナは頷いてみせた。

「そう約束しましたもの」

「君はちゃんと約束を守ってくれるみたいだから、新しい約束もしたいな」

「新しい約束？」

「そう」

翌日届いた王家の印璽が施された書簡には、セレスティアナをアレクシスの婚約者にしたいと記されており、セレスティアナだけでなく両親も驚くことになるのだった。

懐かしくも幸せな夢を見た、数日後のこと。

セレスティアナに來客だと言われ、応接間に向かえば見知らぬ令嬢がソファ―に腰を下ろしていた。

見るからに緊張した面持ちの令嬢はセレスティアナと同じ年くらいだろうか。柔らかそうに大きく波打つピンクブロンドの長い髪は綿菓子を思わせ、どこか幼い印象を与える顔立ちをさらに幼く感じさせた。応接間に入ったセレスティアナを見るなり、バネ仕掛けの人形さながらに勢いよく立ち上がる。

「初めまして、セレスティアナ様。私はミーナ・アルテリアです」

「初めまして。ミーナ様のお話は聞き及んでおります。お目にかかれて大変光栄ですわ」

お互いに淑女の挨拶をするも、どうにも空気がぎこちない。聖女が現れたと父から聞いた時に感じた嫌な予感が再び頭をもたげて来る。

何か、悪いことが起きてしまうのではないか。歓迎すべからざる前兆に思わずセレスティアナが身構えると同時に、ミーナと名乗った令嬢が口を開く。

「いきなりですけど殿下と……アレクシス様との婚約を、解消して欲しいんです」

「それはわたくしの一存では決められませんわ」

本当に何の前触れもない要望を受け、咄嗟に否定の言葉がこぼれていた。

けれど、それは事実だ。アレクシスの名を出されたってセレスティアナにはどうしようもない。むしろ、そんなに親しいのならアレクシスに直訴するべきだ。その方がよっぽど早く、ミーナが望む結果を得られる。

セレスティアナの反応は予想外のものだったのか、ミーナは面食らった様子を見せながらも視線を上げた。

「アレクシス様は私にお城の中庭を案内してくれました。たくさんのお花が咲いて、夢みたいに素敵な場所を二人で歩きながら、私にこれからもずっと、この国を守って欲しいって言ったのです」

「それは」

あくまでも聖女として助力を求めているのではないのか。

指摘を最後まで告げることはできなかった。

アレクシスはミーナに中庭を案内した。セレスティアナと初めて会った、場所に。

中庭自体は特別な場所じゃない。入城許可を得ていれば誰にでも立ち入ることは可能だ。そう分かっていても、アレクシスが案内したという事実が心が乱れ、少しでも否定する言葉を告げたら醜い気持ちが出てしまう気がした。

「優しいアレクシス様はセレスティアナ様に気を遣って、ご自身から婚約破棄を言い出させません。ですから、セレスティアナ様から申し出て下さい」

アレクシスが優しい人だと、セレスティアナだって知っている。むしろミーナが彼の何を、セレ

ステイアナ以上に知っているというのか。

「すでにご存じかもしれませんが、私は聖女と呼ばれるに相応しい力を持っています。そして、その力で未来視ができるんです」

「聖女様がご降臨なさったことは父より聞き及んでおります。ですが聖女様がご覧になられた未来と、わたくしと殿下との婚約にどのような関係があるのでしょうか」

セレスティアナが婚約解消を簡単に受け入れると考えていたのか、ミーナは鼻白んだような表情で忌々し気に見つめた。唇を噛みながら視線を彷徨させたかと思えば、先程よりも強い敵意のこもった目をセレスティアナに向ける。

「ミーナは見たの。あなたとアレクシス様が婚約を結んでいると、いずれ災厄が訪れると」

どうやら早々に取り繕うことは諦めたらしい。

けれど、砕けた口調の方が見た目から受ける印象とはよく合っている。良く言えば、本来のミーナは屈託ない奔放な性格なのだろう。

「災厄とは、どのようなことでしょうか」

「この国が滅んじゃうかもしれないの。セレスティアナ様にも、きっと思い当たる節があるはずだわ」

脳裏を父の姿がよぎった。

父が倒れたことは関係ない。単なる偶然だ。でも。

一度疑ってしまったえば、猜疑心がセレスティアナの心に重く絡みつく。

「ですが……アレクシス様がわたくしとの婚約を結び続けていることと、何の因果関係があるのでしようか」

「因果関係なんて、そんな難しいことミーナは分からないわ。でもセレスティアナ様は分かっています、不安に思ったから言ったんでしょう？ だったらいじわる言わないでミーナに婚約者の座を譲ってよ！」

「いじわるのつもりでは」

感情の昂<sup>たか</sup>ぶりが抑えられなくなったのか、途中から痲癩<sup>ましか</sup>を起こしたように声を荒げるミーナにセレスティアナは戸惑った。何とかして宥めようと思っても、彼女の人となりを知らない状態では何をどう言えばいいのか分からない。なおもミーナは激しい言葉をぶつけ続けた。

「嘘よ！ いじわるじゃないなら譲ってくれるはずだもの！ ミーナは聖女なのよ！ ただの公爵令嬢よりも、ずっと身分が高いのー！」

「もちろん承知しておりますわ」

「それなら……！」

「お嬢様、いかがなさったのですか？」

ミーナの大きな声が応接室の外にまで漏れていたらしい。ドアがノックされ、ミーナははっとしたように口を噤<sup>ひそ</sup>んだ。

途端に室内が静まり返る。冷たく張りつめた雰囲気を感じながらミーナは口を開いた。

「——もう帰るわ。でもセレスティアナ様。くれぐれも、自分の立場を弁<sup>わきま</sup>えていて」

それは「聖女」からの警告ということだろうか。

侍女と入れ替わりに、ミーナは不機嫌そうな表情のまま応接室を足早に出て行く。そんな彼女を見送るセレスティアナの胸に、重苦しい空気が少しずつ広がりはじめていた。

後日、セレスティアナがミーナを屋敷に呼び出し、身分を笠に着て「たかが伯爵令嬢が王太子に近づくな」と強く圧をかけた噂になった。

ミーナ自身が、自分の低い自分では逆らえずに怖かったとも言っているのだという。

数少ない救いと言うべきか、セレスティアナと親しい人々が異を唱えてくれており、またアレクシスに関しては政略で結ばれた婚約者を庇う人格者と称され、彼への悪影響も出ていないようでもある。

だからといって楽観視を貫くには風向きがおかしくなってきた。

セレスティアナは強い不安を肌で感じずにはいられなかった。

(どこからおかしくなってしまったの？ 領地の水の精霊像に亀裂が入ってしまった時から？)  
分からない。

でも一つだけ分かることがある。

ミーナは——「聖女」は、セレスティアナを助けてはくれない。

## 【2】 思慕

貴族令嬢でありながら庶民相手でも自己犠牲を厭わず献身的に尽くす、まさに聖女のような優しい存在。

貧富を問わず、人々の病気を無償で治癒するミーナのそうした噂は瞬く間に市井を駆け巡った。庶民の人気を勝ち得ると噂の広まりは早い。

ミーナは王都で最も人気の高い貴族令嬢となり、それは良くも悪くも看過するにはあまりにも大きく、ひいては社交界でも注目を集める存在になって行った。

今日の夜会でもミーナの周りには多くの令嬢が集まっている。

時折、彼女たちの視線がアレクシスへと向けられているのは気のせいだろうか。何を話しているのかは全く分からないけれど、その頬がうつすらと染まっている。

(アレク様の噂話かしら)

横目でちらりと、傍らにいるアレクシスの様子を窺う。

本当に、素敵な王子様だ。

すらりとした瘦身に落ち着いたブルーグレイのコートがよく似合っている。令嬢たちの噂話にあるのも無理はなかった。

「どうかしたの、ティアナ」  
思わず見惚れているとアレクシスと目が合った。

「あ、いえ……ごめんなさい、様子を窺うようなことをして」

「ティアナは僕の婚約者なのだから、堂々と見ていたらいいのに」

「——はい」

「アレクシス様！」

かん高い声が横から割り込んで来る。

ミーナだ。

彼女が先程までいたはずの方向にさりげなく目を向ければ、一緒にいた令嬢たちの視線をより強く感じる。途端にセレスティアナの心臓が早鐘を打った。

「——アルテリア伯爵令嬢」

「そんな他人行儀な呼び方じゃなくってミーナとお呼び下さい、アレクシス様」

一線を引いたアレクシスの反応に対し、ミーナはにこにこ無邪気な笑みを浮かべて要求をする。そもそも彼女がアレクシスを名で呼ぶこと自体が不敬に値すると言った方がいいだろうか。だけど今は人前で、アレクシス自身も何も言わない。セレスティアナが親切のつもりで伝えたとして出しゃばりだと思われる可能性もある。

迷っていると、上方で何か亀裂が入るような音が聞こえた気がした。反射的に天井を見上げる。

「キヤーツ！」

誰かの悲鳴がひどく遠い場所から聞こえた気がした。

天井に取り付けられているシャンデリアが落下して来る。

「ティアナ、もつとこつちへ——」

「助けて！ アレクシス様！」

アレクシスがセレスティアナに向けて伸ばした手に、横から勢いよくミーナがしがみついた。アレクシスは完全にふいを突かれ、らしくもなく対応が一瞬遅れる。短い舌打ちの音が聞こえ、アレクシスは結界を張り巡らせた。

大きなシャンデリアが結界に叩きつけられる。

その衝撃でガラスが砕け散り、細かな欠片となって降り注いだ。

だけどセレスティアナは結果の外にいた。やっぱりセレスティアナは彼の庇護は受けられない。幸いにして欠片で怪我をすることもなかったけれど、でもきつと、周りにはもつと違う形に見える。

「ねえ、今……」

「ご覧になりました？」

周囲の令嬢たちが囁き合う声が聞こえ、自分の考えが正しかったことを知ったセレスティアナの胸はたちまち苦しくなった。

「ティアナ——」

「アレクシス様、怖かったぁ！」

ひどく怯えるミーナはアレクシスから離れる様子もない。

さすがにアレクシスも力づくで無理やり引き剥がすことはできないようで、やんわりと身体を離すに留めた。

「咄嗟に結界を張って聖女様をお守りするなんて、さすがは王太子殿下ですわ」

「それにしても王宮のシャンデリアが落ちるだなんて……ありえませんか」

「先程、天井を見上げていらした直後にシャンデリアが落ちて来たような……」

ミーナを守る為の行動を賞賛する声と、起こりうるはずのない出来事を不安視する声が周囲にあらがる。

同時に、いくつかの無遠慮で鋭い視線がセレスティアナに突き刺さった。

それはセレスティアナがわざとミーナに怪我をさせようとしたのではないかと言っているも同然だ。だけど表立って反論はできない。非難している証拠はなく、思い込みだと一蹴されればそれまでだからだ。

(でも……)

彼女たちにはきつと、先程のアレクシスはセレスティアナの悪巧みに気がつき、卑劣な婚約者を突き飛ばしてまでミーナを庇ったように見えたに違いない。

実際のところ、セレスティアナ自身にもアレクシスの手で遠ざけられた感触がある。

(だけどそれは咄嗟にわたくしを守る為に)

守る為に突き放したと、相反する彼の行動を説明づけられるとは思えなかった。説得力を持たせ

る為には、セレスティアナが抱える秘密を明かさなければいけない。だけどそれが明るみになって構わないものなら、アレクシスは秘密にするように言わなかっただろう。

その後どうやって屋敷に戻ったのかはよく覚えていない。

ただ夜会での一件以来、アレクシスはミーナと行動を共にする機会が多くなった。

正式な任命を受けずとも、すでに聖女に相応しい評判が高まり、地位を約束されたに等しいミーナに役割と公務を教えることが目的だと分かっている。アレクシスとミーナの二人で行動しているわけでもなく、彼の信頼する側近たちも常に一緒だ。何よりアレクシスから、心配はいらないと手紙をもらってもある。彼の役割が分からない程度の繋がりででもない。

分かっている。

——けれど。

「近頃、あなたに関する不名誉な噂が流れていると聞き及んでおります」

王妃とのお茶会の最中に前触れもなく告げられた言葉に、セレスティアナは身体を強張らせた。

いつ頃からか分からないけれど、アレクシスがミーナと恋仲になったという噂がまことしやかに囁かれるようになった。

こと令嬢だけが集まるお茶会などでは、ミーナも複数の友人と列席していることが多い。そしてミーナの友人たちは聞こえよがしに言うのだ。

『殿下とミーナ様が並び立つ姿はかの建国王と聖女様の再来を思わせますわ』

『仲睦まじげに寄り添って本当にお似合いです』

『穏やかで優しい表情でミーナ様に微笑みかけていらっしやっただわ』  
セレスティアナの友人が、セレスティアナもいる場で失礼だと憤いらだつてくれたところで、彼女たちは見たままの感想を言っているだけで他意はないと答える。

そう、誰も『アレクシスはミーナを正妃に迎えるべきだ』とは言わない。ただ王子様に憧れる令嬢の立場で夢を語っているにすぎない。

ただど夜会での騒ぎが起きてから、セレスティアナは邪魔者扱いだ。表立って言ってくる人物こそいなくとも陰で悪く言われている。

(わたくしが、アレクシスの幸せを阻む「悪役令嬢」だ)

やはり、王妃もアレクシスの妃にはセレスティアナよりもミーナの方が相応しいと思っているのだらうか。

精霊の加護を強く受ける四大公爵家の一つに生まれながら魔力の少ない令嬢より、聖女の資格を持つ伯爵令嬢が王太子妃に収まった方が王家にとってもメリットがある。だから早く身を引けばいいのだ。

王妃が薄情な人物ではないと分かっていても、だからこそ王妃さえ現状と世論の板挟みになりかねない。

「至らずに申し訳ございません」

何とか声を振り絞って謝罪を伝えると王妃はやりわりと首を振った。

「あなたが謝罪する必要はありません。それどころか、わたくしたちの方こそ、無責任な噂すら止

められずに申し訳ないと思っているわ」

「もったいないお言葉でございます」

セレスティアナは目を伏せた。と同時に、ひときわ大きなため息を王妃が吐き出す。

「それに……聖女様ご降臨のことさえ、緘くは口令を敷いたはずなのに」

ミーナは市井への救護活動に力を入れているものの、それは貴族令嬢にとって特に珍しいことではなかった。セレスティアナもアレクシスや、時には家族の誰かと病院への奉仕活動を月に一度は行っている。

けれど聖女となると別だ。聖女の魔力が必要とされるほどの事態が差し迫っているのかと、いたずらに不安を煽ることのないようにその出現は極秘とされていた。

にも拘わらず、いともたやすく聖女が存在は人々に知れ渡ることとなった。立ち振る舞いが聖女のようなというのではない。魔力そのものが聖女のものだと言われている。それはつまり、重要な情報を得られる立場にいる人物の誰かが王家の意に背いているということだ。今はさほど大きな問題ではなくとも、いずれ問題にならないとも限らない。

地の精霊を司るノーマンゼウル公爵家の領地の一部に原因不明の腐食地帯が発見されると父から聞くのは、その翌日のことだった。

偶然だらうか。

四大公爵家のうちの二家が、立て続けに不幸な出来事に見舞われる。これは一体何が起きているのか。

(本当に……わたくしがアレクシス様の婚約者でいるから?)

因果関係の有無は分からない。

だけどセレスティアアナは、それが必然だとしか思えなくなってしまうていた。セレスティアアナはアレクシスの妃に——王太子妃に相応しくない秘密を隠し持っている。アレクシスが秘密にするように言ったそれは、本来なら王家に嫁ぐ存在が持つていてはならないものだ。万が一にも噂が広まれば、アレクシス自身や家族にも大きな迷惑をかけてしまうだろう。

現状を快く思わない人々に暴かれるくらいなら、被害を最小限に留めればいい。

簡単な話だ。収まるべきところに収まればいいだけ。

セレスティアアナが、アレクシスの婚約者の座をミーナに譲る。

——それだけの、話だ。



「ティアアナが来てくれるなんて珍しいね。——その様子だと、遊びに来てくれたわけじゃないみたいだけど」

「突然訪れたりして、申し訳ございません」

「いや、嬉しいよ。早めに用件を終えて少しのんびりして行くといい」

「お気遣いありがとうございます」

変わらないハイネルの歓迎を受け、セレスティアアナは緊張を覚えて強張る肩の力を静かに抜いた。今日こうして、ハイネルの優しさに甘える形で訪れたのは他でもない。

「……殿下との婚約を解消できないかと思っております」

婚約の解消を要求して来たミーナにも伝えたように、アレクシスとの婚約は個人の、気持ちの問題ではどうにもならないものだ。

それでもセレスティアアナが唯一アレクシスの力になれることがあるとしたら、婚約者の座をより相応しい人物に譲り渡すことだろう。

まだ具体的な解決策も見つかってははいないけれど、確実にセレスティアアナの味方になってくれる第三者が欲しくて、それにはハイネルが最も適しているように思った。王家にいちばん近いオルランドイ公爵家からの進言もあれば、いかに国王とて聞き入れないわけにもいかないはずだ。

「それはまた、ずいぶんと急な話だね。ティアアナがそう思っていることをアレクシスは知っているのかい」

さすがのハイネルも驚いた様子でセレスティアアナを見つめる。探るような視線を受け、セレスティアアナはゆっくりと首を左右に振った。

「殿下はご多忙のようでお会いできません。ですから今はまだ、わたくし個人が心に秘めているだけに過ぎません」

「それを僕に話してくれたということは、ティアアナは僕を信用してくれているわけだ」

「はい」

「だとしたら光栄だね」

セレスティアナが婚約解消に至った理由をハイネルは尋ねなかった。それは噂を知っているから聞くまでもないと思っているのかもしれない。理由が何であれ、自分の無力さを説明しなくて済むのはありがたかった。

ハイネルは自らの顎を右手の人差し指でつまみ思案する様子を見せる。やがて考えがまとまったのか軽く頷き、面倒ごとを持ち込んだはずのセレスティアナに向けて微笑んだ。

「王命に背くことになってもティアアナが婚約解消を願うのであれば、僕も及ばずながら協力するよ」

「ハイネル様の御手を煩わせるようなことはいたしませんわ」

「ティアナの頼み事はいかなるものであっても、煩わしいと思ったりしないさ」

「ありがとうございます」

セレスティアナは深く頭を下げた。

聖女を支持する大勢の人心が王家から離れてしまう前に、セレスティアナが身を引くのがいちばいい。アレクシスが善き王になれば、セレスティアナも幸せだ。いちばん近くで手助けできないだけで、セレスティアナの献身も変わらない。

「——もしも」

「え？」

ハイネルが小声で何かを言った。セレスティアナが聞き返すと、ハイネルは真剣な表情で今度は

はつきりと口を開く。

「もしもアレクシスとの婚約解消が成立したら——ティアナはどうするつもりなんだ？」

「殿下と婚約を解消したら……」

それを口にするだけでセレスティアナの胸が軋んだ。

後のことなんて、何も考えていなかった。いかに自分が衝動的で短絡的な行動に出ようとしているのか、真つすぐに突きつけられたようで苦笑いが浮かぶ。でも、そこまで考えなければならぬことだ。

「王太子殿下との婚姻が叶わなかった令嬢を娶りたい方も現れないでしょうから……領地に戻って、精霊に祈りを捧げ続けようと思います」

何よりセレスティアナが、他の誰にも嫁ぐ気にはなれない。それでも遠くからアレクシスの為に祈り続けることは、思うほど悪くはない気がした。

「——そうか」

「はい」

無事にハイネルの協力を取りつけてウォルタスタン公爵家へと帰る道すがら、たくさんの思い出が次々と浮かんで消えた。

『セレスティアナ嬢、君の魔力は多分、他人の魔力を無効化してしまうものだ』

『無効化？』

『そう。前に会った時、僕は誰にも存在を感知されないよう魔力で遮断していた。でも君には効力